

第1回

女性と不定愁訴

高橋浩子先生

ひろこ漢方内科クリニック 院長

はじめに

「だるい」「無気力」「ふらふらする」治療は手詰まり。憂鬱そうな患者に、ちょっとうんざり…。そんなとき漢方薬が使えると楽である。西洋医学的に苦手なところをいかにカバーするか。古典や、脈診、舌診、腹診がよくわからなくても、効果的に漢方薬を使いわけることができる。決め手は構成生薬を理解することである。

漢方薬は主に草根木皮のような生薬を複数組み合わせで作ったものである。原始時代に食物を探し求める過程で毒物や薬物としての役割を持つ物質を経験的に反復、進化させ、薬物療法を編み出してきた。医食同源と言われる所以である。処方構成は2000年前と変わらない。発売当初は目新しくてもそのうち時代遅れになる、ということが漢方薬ではありえない。自分の経験や学習した内容は、年を重ねても古びることなく頭に残っていく。漢方の勉強が楽しいのはそのためである。

漢方薬は弁当だと考えるとわかりやすい。どんな弁当にもご飯や漬け物があり、おかずが唐揚げなら「唐揚げ弁当」になる。弁当のご飯が、気を補い胃腸の働きを整える補気健脾作用の「人参・甘草・黄耆・朮・大棗・粳米・膠飴・茯苓・山薬」などである。吸収をよくして、胃もたれをとるのが「陳皮・半夏・生姜」などで、これらは漬け物にあたる。ご飯漬け物は、主役(おかず)のよさをひきたてるためになくてはならないパイプレーヤーであると同時に、単独で主役をはることもできるすぐれものである。どんな方剤にも、ご飯漬け物、すなわち補気健脾の生薬が入っている。その上で、おかずが駆瘀血薬なら、その漢方薬は「駆瘀血剤」であるし、気持ちを落ち着ける生薬ならば「安神剤」、痰切り咳止めならば「祛痰剤」と分類される。

漢方医学では「気・血・水」が体の中を巡っていると考える。気血水は、日々の営みの中で体が作り出す産物である。「気」は、人体の生理機能のことで、からだをあたため発育成長させ、抵抗力をつけ、飲食物を消化吸收し、汗、尿、便、血液が排出過多にならないように調節する。「血」は、内臓や筋肉、骨格な